

VI 総合的な学習の時間（はばたき学習） 2年次の成果と課題

1 成果

(1) 探究的な学習過程の質を高める省察場面の明確化

今年度は、「探究的な学習過程のどこに省察を位置付けることが、学びの質を高めることにつながるのか」という問いを基に、各学年の実践に取り組んだ。3年生では、通町の魅力について探求していく中で、省察の場面を設けたことにより、商店街の方々の努力も発信したいという新たな課題を見いだすことができた。4年生、6年生では、よつば学習と関連を図りながら、実践や体験の前後にシミュレーションや「対話」を通した協働的な省察を位置付けたことで整理・分析の質を高め、相手とよりよいかかわりをするためのポイントを概念化していくことにつながった。5年生では、自然の中での活動の前後に省察を位置づけたことで、自分の生活や生き方についての課題を見いだすことができた。また、各学年のまとめ・表現の過程では学んだことをだれに対して・どのように伝えるかという目的を意識しながら、内容・方法について省察を行うことが質の高まりにつながった。今年度の実践から見えてきた探究的な学習過程の質を高める省察を整理したものが以下の四つである。

- ・ 予想や理想と現実との「ずれ」に気づき課題を見いだすための省察
- ・ 多様な方法で収集した中から必要な情報を吟味するための省察
- ・ 整理・分析しながら対象の本質を概念化するための省察
- ・ 学びの成果を踏まえて課題や生き方を更新するための省察

また、上記いずれの場面でも、個人的な省察と、「対話」を通した協働的な省察を効果的に位置付けることが非常に有効であった。

(2) 試行し修正しながら探究し続けることのできる単元構成

探究的な学習過程は本質的に試行錯誤を伴うものである。なぜなら、本当に追究したい課題、よりよい解決方法、より効果的な表現—といったものはいずれも実際に“試しにやってみる”中で得られる、フィードバックがあって初めて見いだすことができるからである。だからこそ、総合的な学習においては子どもたちが存分に“失敗できる”場を保証した単元構成が必要となる。

6年生の実践では、全校のみんなに学ぶ楽しさを伝えるために、各学年と計5回に渡り交流する場を設けたことで、失敗の中から教訓を見だし、本当に伝えたいことやよりよい方法を見いだしていく子どもの姿が見られた。

このように、各教科等における「見方・考え方」を総合的に活用し、多様な角度から俯瞰して捉え、問い続けることが求められる総合だからこそ、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という四つのプロセスを存分に往還し、失敗という経験を通して自分にとって価値あるものを見いだすことができる単元構成とすることが肝要である。

2 課題 適切な方法を選択し自覚的に用いながら、課題解決に取り組む力を高める支援

今年度は、課題解決に用いる「見方・考え方」を選択し、自覚的に用いる力を高めることを目指し、各学年で実践に取り組んだ。探求の各過程で、発達段階に応じた多様な方法の中から選択して用いる活動を位置付け、課題解決に取り組んだものの、子ども一人一人が目的や自分に合った「適切な」方法を、自覚的に用いながら、課題解決に取り組むという点では課題が残った。

その原因としては、何が適切だったのか結果を基に検証する活動や、再選択する機会が不足していたことが考えられる。こうした課題を改善していくことは、子どもたちがよりよく課題を解決する資質・能力を高めることに直結するものである。省察と関連付け、各教科等の学習で学んだ中から、より効果的な方法を選択していく子どもの姿を目指し、3年次の実践に取り組みたい。